

東日本大震災 MSW 災害支援ニュース



JASWHS 公益社団法人 日本医療社会福祉協会  
Japanese Association of Social Workers in Health Services

平成 28 年 4 月 13 日 第 5 巻 (第 12 号)

発行：東京都新宿区住吉町 8-20 四谷チンゴビル2F

災害支援チーム TEL (03)3351-5038

FAX (03)5366-1058

Mail: dsstsw@jaswhs.or.jp

## もくじ

1. バトン寄稿 — Part 9
2. 活動報告
3. 退職の挨拶
4. 災害支援チームからのお知らせ
5. 災害支援ニュース発行のお知らせ
6. あとがき

「東日本大震災医療ソーシャルワーカーの支援のバトンⅠ」 発売中！！

「東日本大震災医療ソーシャルワーカーの支援のバトンⅡ」 発売中！！

「東日本大震災医療ソーシャルワーカーの支援のバトンⅢ」 発売中！！

詳細は“4. 災害支援チームからのお知らせ”をご参照ください。

## 1. バトン寄稿 — Part9

~~~~ ~~~ ~~~

当協会の東日本大震災での支援活動は、5年目を迎えました。それぞれの時期に当協会の会員であった方々が責任者や担当として、現地にて協力員と共に支援のバトンを紡いでくれました。

~~~~ ~~~ ~~~

今回は2名の報告となりました。

まず、東日本大震災発災当初から災害対策本部役員として、2013年7月から災害支援チームを統括責任者として、被災者支援活動を支えてきた笹岡からの報告です。

.....

σ σ σ σ σ

### 石巻市への支援、5年間を経て今考えること

σ σ σ σ σ

#### 災害支援チーム

統括責任者 笹岡 眞弓

今年の3月11日の前後は、5年目という節目だという思いがあるのか、マスコミの特集、特別番組などが巷にあふれ、私自身も様々な思いにとらわれた。私のような普段東京にいるものでさえそうであるのに、被災された方々の思いは言うまでもなく、当協会の職員として現地に居住して、ソーシャルワークに取り組んでいるチームメンバーはいかほどかと、改めて考えた。

わずか3名で、15万人弱の人口を抱える石巻市の未だ1割が仮設或いは民間借り上げ住居に住まわざるを得ない状況に対応することは、ある意味「螻蛄の斧」であるかのような誤解を生む。それもたやすく。

いつまで活動を継続するのか、その意味は？被災された方最後の一人まで支援するのか？いつまでも外部支援者がとどまる事は現地の力を阻害するのではないのか？これらの問いに明確な答えを提

示できず、現在を迎え

た。5年の活動の中間

総括には今から取り組み、活動の意味と意義を2016年度中には明確に答えたい。

5年間に協会職員としてソーシャルワーク活動をした人数は10名、協力員の延べ人数は4000名を超えた。実人数は300名を超え、そのうち3回以上協力した方は50名に上る。

活動の経過は、バトンⅠ、Ⅱ、Ⅲに詳しいが、福祉的避難所支援から始まる医療職をはじめとする多くの専門職、NPO、大きな存在である市役所の各課との連携を要に、個別ニーズに丁寧に対応し今に至った。徹底して市役所のニーズに沿ったことは信頼を得、ソーシャルワークの認知が高まった。しかし、目的と方法が常に流動的で主体性に欠けたという側面も否定できない。時には協力員の達成感のために奔走せざるを得ない状況も生



じ、そのために現地職員の疲労が増大した。300人規模のSWの管理は今後の課題である。

そういう面はあったが、ソーシャルワーク支援の質を担保するためにサポートチームを結成したことで多くの困難を乗り越えられたと思っている。具体的には支援事例のスーパービジョンを国際医療福祉大学の相原和子氏に依頼し、グループワークには元聖路加国際病院の西田知佳子氏を月に2回現地に派遣した。支援チームは総勢10名を数え定期的に会議をもち支援体制を整備している。

医療ソーシャルワーカーの全国団体としての石巻支援について、全国組織だからなし得たことは何であろうか？社会福祉協議会との連携は、MSWを職員として派遣したことでかつてなく強固になった。市役所との連携は同じく虐待防止センターへの職員派遣と、復興公営住宅の説明会への支援によって、多くの部署の信頼を得た。説明会は東京、山形、盛岡でも開催され、全国組織だからこそ全ての地域に協力員を派遣できたからこそその結果であった。だからこそ自立困難世帯と呼ばれる人々への支援を求められ、2016年からは5名体制で事業を継続することになった。支援が継続されたからこそソーシャルワーク支援の定着に貢献できたのだ。5年前にはソーシャルワークは無名だったと言っても過言ではない地域での定着には大きな意味があるだろう。

今言えることは、膨大なソーシャルワークニーズに応えるためには、5年間では不足であり、この時間の量的な感覚を得たという経験が予測される次の震災に生きること。さらに困難事例への対処にはじまる我々のソーシャルワークを検証した結果は、次代への確かな成果物となりうること。そして石巻市立病院が津波で壊されたあとの、建設されている新病院のMSWは我々のチームの松川夏実氏が選ばれたこと、である。

現地の5名のSWは、国際医療福祉大学の教員を経て4年間岩手県大船渡市で活動した福井



康江氏を始めとして、3年間の活動において2年間責任者として職責を全うした畑中良子氏、3年目を迎えた岡村翠氏、広島から金崎慶大氏、千葉から菊田駿氏である。

大ベテランから3年目のソーシャルワーカーで構成されるこのチームの今後の活躍に期待をこめ、我々も努力したい。



次は、2013年度は石巻市虐待防止センター勤務と現地担当を兼任し、  
2014年度と2015年度の2期、現地責任者を務めた畑中の報告です。

∞ ∞ ∞ ∞ ∞  
活動を振り返って  
∞ ∞ ∞ ∞ ∞



災害支援チーム  
石巻現地責任者 畑中 良子

私が石巻で活動をしようと思ったきっかけは、  
2011年7月に協力員として福祉的避難所である  
遊楽館での3日間の活動があったからです。

東日本大震災が発生してから4か月後の石巻を  
始めて訪れ、街中の様子を見た時は本当に言葉を  
失いました。そして、遊楽館で活動をしましたが、  
避難されていた方のお話を伺っても方言のため  
全てを理解する事が難しく、ここで支援するには  
言葉の理解、文化を理解しないとダメだ、と思い  
ました。それから当時、働いていた職場の上司と  
話し合い、2013年4月に当協会の石巻現地スタ  
ッフとして着任しました。

2013年度の1年間は石巻市・虐待防止センタ  
ーでの活動と当協会の現地活動とを兼任していま  
した。現地スタッフが3名と拡大はしましたが、  
私のほかの1名が現地活動の専任、1名が石巻市  
社会福祉協議会・災害対策支援課（当時）と配属  
先がバラバラでした。この活動が各関係機関との  
連携をよりスムーズにし、後々もその関係を保て  
てきたと感じています。

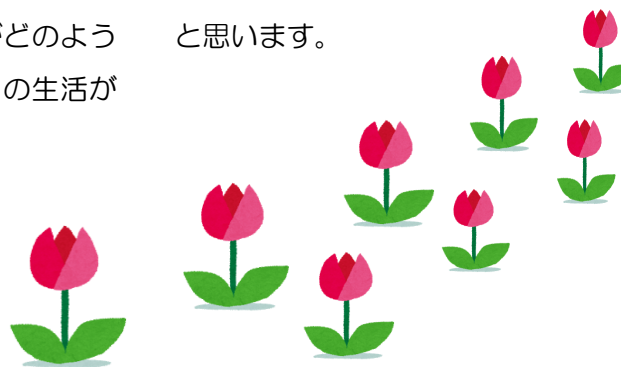
着任当時は震災から2年が経って、街中からは  
瓦礫はなくなっていました、「復興」というには

まだまだほど遠い感じがしました。今から振り返  
ると、人々の暮らしは仮設住宅である一定の落ち  
着きを見せていましたが、支援者（ボランティア  
も含む）の一方的な支援が続いており、そのバラ  
ンスの悪さがあった1年間だと思います。

2014年度からは前年度と現地スタッフが入れ  
替わり、現地スタッフ3名全員が現地活動に専属  
となりました。新しいメンバーとのスタートでし  
た。健康調査のフォローや復興公営住宅への本格  
的な移行支援などこれまでの活動を基盤とした業  
務が増えました。特に復興公営住宅の移行支援（書  
類申請の手続きや引っ越しに伴う支援）のニーズ  
が想像以上に多く、その対応に追われる日々を過  
ごしました。しかし、「生活の場」が定まらないと  
安定した生活は送れません。終の棲家となるだろ  
う「生活の場」を決める事の難しさ、震災前まで  
生活していた場所への想い、次の場所に移ろうと  
思うまでの気持ちの変化など、住民さんはたくさ  
んの葛藤を抱えておられます。一人一人のお話  
しを伺いながら、ペースを崩さず、次の生活の場へ  
移れるように支援をしてきた2年間だったと思い  
ます。

石巻に移り住んで 3 年が経ちました。これまで  
見えてきた課題にソーシャルワーカーがどのよう  
に関われば良いか、を考えながら、人々の生活が

安定するような支援をこれからも続けていき  
たいと思います。



## 2. 活動報告

国立病院機構 医王病院（石川県）

中本 富美

2016年3月7日～3月9日

1 年に 1 回は石巻に行くことを決めて、今年 5  
回目の活動となりました。今回は社会福祉士相談  
事業および仮設住宅被災者自立支援事業における  
現地 SW に同行させていただきました。復興公営  
住宅が立ち並び、環境整備は確実に進んでいるな  
かで、仮設住宅後の生活が決まらないひとたちの  
問題に着目し、訪問を実施。また入居が決定した  
が、その後の準備等に支援が必要な人、経済的問  
題を抱えた人たちへの積極的な相談活動を実践さ  
れています。相談活動を積極的に行われています。  
現地 SW の方は個別支援を通して、対象者の力に

働きかけ、伴走者としての役割を担いながら、も  
う一方ではこの地の支援者につなぎ、ソーシャル  
ワーク支援の土壌を育むことを常に念頭に置きな  
がら活動を展開していらっしゃいました。協会の  
活動は期間に限りがあり、そこでソーシャルワー  
ク支援につながらない人が取りこぼされないよう  
にアウトリーチし、その先に困ったことや不安な  
ことがあれば相談ができる人と場があることを伝  
えていくことまでを役割としていることが伝わり、  
現地 SW の果たす役割の大きさを改めて実感して  
います。



畑中さん 岡村さん 松川さん

本当に素晴らしい活動と被災者の方への思いに感動いたしました。

郷里を離れ、ソーシャルワーク支援の必要性をひとに地域住民に、行政に、改めて全国の私たち SW たち  
発信していただけていることに深く感謝しています。



ありがとうございました。

毎日、追われるように過ぎていく日々だと思いますが、どうぞご自愛ください。

私は何やかやと日常の忙しさを言い訳にして、現実から逃げるのがないように、また石巻を訪れたいと思います。またいつかどこかでお会いできますことを願っております。

毎月1度、活動を続けていらっしゃる笹岡さんにもよろしくお伝えいただければ幸いです。

ありがとうございました。

年月が経ち、あの惨事が風化されていくと言われます。風化—それは私たちの意識が生むものです。私たち自身が被災地に何が起きているのかを思いはせることが風化を防ぐことだと思います。そういう自身も、いつの間にか日常から遠のいている現実を否めません。自戒を込めて、1年に1回石巻を訪れることでソーシャルワーカーができることを考えられるのかもしれない。



### 3. 退職の挨拶

災害支援チーム

石巻現地担当 松川 夏実

平成28年3月末で、災害支援チーム石巻現地を退職することになりました。約2年の現地での活動では、改めてソーシャルワーカーらしい仕事をさせていただいたと思っています。現地で学んだことを生かして、今後もソーシャルワークを続けていきます。全国から来て下さった協力員の皆様、現地活動を支えてくださる会員の皆様、そして災害支援チームの皆様、約2年間本当にありがとうございました。





『東日本大震災 医療ソーシャルワーカーの支援のバトンⅢ』の

販売を行っています！

発災から2011年9月30日までの石巻・仙台・大槌町・事務所・災害対策本部の活動の記録を『バトンⅠ』に、2011年10月から2012年12月までの災害対策本部、石巻市での仮設住宅支援・在宅被災世帯支援・市民活動支援、現地SWとの協働の記録を『バトンⅡ』に、



2013年1月から2014年3月までの災害支援チーム、石巻市での仮設住宅支援・在宅被災世帯支援・市民活動支援、虐待防止センターでの支援・石巻市社会福祉協議会での支援、現地SWとの協働の記録を『バトンⅢ』にまとめました。

尚、売り上げの全額を皆様からの寄付として、本活動の資金にあてさせていただきます。

※ご注文は注文用紙で承ります。

(注文用紙はホームページからダウンロードできます)

バトンⅠ:URL: [http://www.jaswhs.or.jp/data/publishing\\_detail.php?@DB\\_ID@=45](http://www.jaswhs.or.jp/data/publishing_detail.php?@DB_ID@=45)

バトンⅡ:URL: [http://www.jaswhs.or.jp/data/publishing\\_detail.php?@DB\\_ID@=47](http://www.jaswhs.or.jp/data/publishing_detail.php?@DB_ID@=47)

バトンⅢ:URL: [http://www.jaswhs.or.jp/data/publishing\\_detail.php?@DB\\_ID@=54](http://www.jaswhs.or.jp/data/publishing_detail.php?@DB_ID@=54)

#### 【4. facebook】



facebookでも情報をお伝えしています。現地や災害対策本部の日々の様子をお伝えしています。応援よろしくお願いたします。

URL

<http://ja-jp.facebook.co>





あっという間に、4月も中盤ですね・・・。



東日本大震災 MSW 災害支援ニュース

平成 28 年 4 月 13 日 第 5 卷 ( 第 12 号 )

作成 日本医療社会福祉協会

災害支援チーム事務局